

『寺社縁起の文化学』

日沖 敦子

待望の学術書が誕生した。従来の研究の枠

組では捉えきれない、時代とジャンルを横断する文化研究の試みと方向性を示した斬新な一書である。動態的なメディアとして「寺社縁起」を捉えなおす試みでもある。「躍動する寺社縁起」とでも名づけようか、開帳、噂、講釈、系図、由来書など、収載論文のタイトルに含まれる語からも、本書が目指す寺社縁起研究の一端を垣間見ることが出来る。

全体の構成は、まず、序文「寺社縁起の転換期―近世から近現代へ」（堤邦彦）、「新しい縁起研究に向けて」（橋本章彦）により、本書が捉えようとする寺社縁起研究の視座が提示されている。

続いて第一部として、十六名による各論が、以下五項目で構成されている。

(1) 寺社縁起の生成と展開―「寺社縁起」と談義・直談―江州阿弥陀寺縁起をめぐって（徳田和夫）、「組織と縁起

―平安・鎌倉期の真言密教における〈縁起〉言説」（藤巻和宏）、「近世寺社縁起の戦略性―三河国鳳来寺縁起を事例として」（加藤基樹）

(2) 変容する寺社縁起―「神仏の噂―靈験の演出をめぐって」（伊藤慎吾）、「月感伝承の在地的様相をめぐって―近世真宗の内紛とうごめきの中で」（菊池政和）、「近世唱導と文芸・芸能」（北城伸子）、「火車説話の受容と展開」（山田巖子）

(3) 縁起の機能―鎮魂と救済―「法然上人伝から古浄瑠璃『ほうねんき』へ」（佐谷眞木人）、「いくさ語りから怪談へ」（堤邦彦）、「僧と亡者の昔話」（花部英雄）

(4) 女性文化圏と縁起―「尼僧の〈聖地〉としての真如寺」（西山美香）、「物語草子としての形成と受容―『お湯殿

の上の日記』を通じて」（恋田知子）、「民間巫女の群像―在地のなかの縁起語り」（川島秀一）

(5) 演じられる縁起・道具としての縁起―「戯け開帳と縁起講釈」（福原敏男）、「虚構の系図・由来書」（大島由紀夫）、「縁起のメディア―開帳における縁起」（久野俊彦）

第二部では「縁起学」の可能性」と題したシンポジウム（佐谷眞木人・堤邦彦・徳田和夫・橋本章彦・山田巖子）が繰り広げられ、「寺社縁起研究の対象・範囲」「由来語りと縁起」「現場性と信仰性」「聖なるものの変質」「神話と縁起」「縁起と物語性」「祝ることの意味」「都市空間と民俗社会」「縁起のリアリテイ」「通時性の視点」「略縁起とは何か」「中世文学研究のなかの寺社縁起」「民俗学のアプローチ」「縁起を受容する側」「ゴジラ・昭和二九年の意味」「縁起学」の可能性」について議論がなされ、今後の寺社縁起研究の展望と課題が深められている。

序文に記されているように、縁起とは「縁起と称するタイトルをつけた、特定の文章」（日本思想大系「寺社縁起」）であり、「比較的古いもの」を指すと考えられてきた。「大

日本仏教全書』寺誌部には、数多くの寺社縁起が収載されており、資財帳の類を含めて、歴史的価値を重んじた編纂意図がうかがえる。また、縁起を研究する場合には、史実性と実証性が求められる傾向にあった。そのため、多くの寺社縁起が、寺宝や本尊の由来を説く霊験記を含み、物語草子や民間伝承へと展開する素地を含んでいるにも関わらず、その豊饒なる物語世界は軽視される傾向にあった。数多くの縁起が紹介されながらも、史料としてしか検討されてこなかったものも数多くある。本書に記されているように、縁起が「宗教学の補助的手段」としてしか見なされていなかったことが一つの要因として考えられよう。このように歴史的価値ばかりが追究されがちであった縁起研究に問題を提起し、寺社縁起の定義の見直しを行ったのが五

来重氏（宗教民俗集成六『寺社縁起からお伽話へ』）であった。氏は「伽藍縁起並流記資財帳」のように、公文書として歴史的な正確さが求められる「歴史的縁起」と、神仏の奇跡を説く「物語的縁起」、さらに「密教的縁起」を加え、縁起を三分類した。多様性ゆえに雑駁とした印象を与えがちであった縁起を分類し、庶民信仰的価値を「物語的縁起」に見い

だし、「歴史的縁起」とは異なる価値を提示している点で、氏の研究は特筆に値する。本書に示された旧来の学問体系の解体から誕生する「縁起学」の提唱は、このような寺社縁起研究の流れの中で発生したものであると位置づけてよいだろう。

橋本章彦氏は、従来の研究に一定の評価を示しながらも、さらに寺社縁起を「世界認識の方法」として次のように捉える。

人は、現在を理解し未来を考えると、必ず過去を振り返り、自身の「今」を時間の流れの中で認識しようとする。この営為は、言うならば、現在を「基礎づける」行為である。人は、こうした行為によって、はじめて現前する事象に対して意味を見いだすことになる。それ故に「過去の記述」は、時代や環境を超越して、常に人々が世界認識の方法として採用してきたところであった、本書で問題とするところの「縁起」もまた人間のそうした営みの一つとして日本文化に立ち現れてきた存在といえる。

そして、便宜上作られたはずの学問領域とその領域が持つ研究対象への認識が、我々のなかで固定化されてしまうことに警鐘を鳴らす。領域が存在することにより、見えなくなっ

てしまった世界を、縁起を通して焙り出そうとする。古典的価値や史料的价值ではなく、縁起がどのような文化を内包しているか、言い換えれば、縁起がどのような人間の営為を映し出しているかという点に、縁起の価値を見いだそうとする。旧来の学問体系では解明できなかった文化の種々層を、縁起を通して焙り出す試みは、従来の縁起を扱う研究の多くとは性質を異にするものであり、まさに本書が提唱する「縁起学」という名に相応しい。よって、本書に示される諸研究は、冒頭で述べた、開帳、噂、講釈、系図、由来書などの「縁起的なるもの」や、映画や漫画といった現代メディアをも内包した、旧来の「宗門公認の歴史的、正統的な「縁起」研究から見れば、大きく拡大した縁起研究なのである。

それでは、本書第一部の項目に沿って、諸氏の論稿を通して構成の概要を記す。

〔一〕寺社縁起の生成と展開〕では、縁起が語られる場に注目し、縁起が内包するその他の宗教的言談との交差や、場の変容に伴う縁起言説の変容、縁起の形態的变化について論じられている。縁起に「談義・直談書の伝襲」がうかがえることや、縁起が「講經説法の場合で説話や伝承の接合によって錬成された」こ

とを示す個々の事例は、物語草子類への展開を含め、中近世文化史を捉える上で極めて重要である(徳田和夫)。また、「縁起学」は「事物の(現在)を(過去)との繋がりによって説明し、その正当性を保証すべく機能する言説」であって、テクストのみを対象とするのではない。よって、「宝珠」が各地に散在し、様々な文脈に取り込まれ、縁起を語る切り札として再生産されていき、組織を形成していく様相も「縁起学」の対象となる(藤巻和宏)。このほか、近世の動態的な寺社縁起・伝承の流布、教宣の手段として作成された「略縁起」は「近世寺社が自らの寺社縁起を正し続け、社会的合意を得る必要のもと、戦略的に作成・展開したもの」として再評価されるべき対象であることも指摘されている(加藤基樹)。

寺社縁起の変容を促す、語り手、担い手の問題は、実態に即した「縁起学」研究に不可欠な要素である。「(2) 変容する寺社縁起」では、寺社建立に際し「神仏の(尊)」を方便として利用する「勸進聖」の活動や心的背景の培り出し(伊藤慎吾)、地域伝承や縁起を通して浮かび上がる、在地における一学僧の活動に関する検討(菊池政和)などが試み

られている。また、祐天が地蔵の化身と信じられ、宗教言談の場で語られる一方、歌舞伎舞台で具現化され、寺院の霊宝へ帰還するというシステムは「宗教と娯楽の垣根を越えて信仰世界が拡大されていく、近世仏教のもつダイナミズムを提示」する例として捉えられよう(北城伸子)。このほか、在地伝承の展開に伴い、ハナシが「談話の場でその時々編み直され」ていく事例として、茨城県岩井市の火車説話が取り上げられる(山田巖子)。事象にリアリティを求め、語りなおしていくことは、縁起が再生産されていく様相とも通底する。

「(3) 縁起の機能―鎮魂と救済―」では、宗教性を内包した死者追悼の語りが、軍記物、縁起、昔話、僧伝などのなかに、形を変え、機能した事例について論じられている。例えば、『法然上人伝記』の展開を通して、僧伝も「常に現実の信仰とかわりながら存在した」のであり、時に「事物の由来を保障する文書として」機能した可能性が指摘されている(佐谷真人)。死者追悼の文芸が人々に広く支持される背景として、数々の縁起を発信する宗教者の存在や、戦いを描く文芸が語る追悼の有様、時代を超えて顕在する「情念

の発露」の存在が指摘されている(堤邦彦)。追悼を材とするのは軍記や高僧伝に限らない。唱導説教を通して、発生した比喩因縁が形を変えつつ昔話や世間話に定着していく様(花部英雄)についても注目できよう。語り、享受する民衆側に立ちあらわれてくる鎮魂の文芸は、民衆史のなかで解明されていくべきものの一つである。

「(4) 女性文化圏と縁起」では、文化的世界観の変容を促した女性文化圏の問題について検討されている。近代の研究史において、女性文化圏の実態と文芸享受の有様については殆ど注目されてこなかった。日記や和歌、物語草子、縁起の執筆や享受に関与した女性についての研究は極めて少なく、近年ようやく西口順子氏(「中世の女性と仏教」)らの研究によって、実地調査を含め、進展しつつある。女性文化圏の中で一つの縁起語りが形成され、把握されていく事例として、皇女の追善に際し、後水尾天皇により真如寺法堂が再興されたという政治的背景が、尼僧如大の由緒の「再発見」に繋がる出来事であった(西山美香)という指摘は興味深い。そして、物語草子の世界を考える上でも、女性文化圏における縁起、物語生成の実態を求める視座は

重要である（恋田知子）。また、中近世における文芸の生成空間を立ち上げるこれらの研究と併せて検討されるべきことは、在地への視点であろう。本書では、民間巫女の縁起語を通し、信仰の拡大が計られた事例として「大乘寺縁起」（岩手県川崎村）が取りあげられている（川島秀一）。

〔5〕演じられる縁起・道具としての縁起」というという概念設定は、「寺社の外部に流し定着した民間縁起の存在を鮮明にする」装置でもあった。近現代の見世物までも寺社の縁起・伝承の生成環境とし、「寺社の伝承、ものがたりを民衆に伝達する装置」として考察対象とすることで、動態的な縁起の形態を浮かび上がらせる。開帳は「縁起のマスメディア」であり、付随する見世物や芸能により「人々の知的好奇心と行楽欲求を満たす」ものでもあった（久野俊彦）。また、「戯け開帳」という「開帳に見立てた見世物興行」の流行は、近世後期の「信心のあり方の変化」として注目できる（福原敏男）。このような開帳の場と密接に関わるのが、先に述べた「略縁起」であろう。一方、政治性という観点から考えるならば、寺社縁起は、近年注目されている偽系図や由来書の研究とも連なる問題を

含んでいる。自らの正当性を唱えるべく縁起を制作し、語り広める必要が生じるのは、まさに「正当性のゆらぎ」を意味する。文書に根拠を求め、「自己の存在を確認しようとする」偽系図や由来書の姿勢には、「寺社縁起」とも通底する神話的機能」が認められる（大島由紀夫）。

計五項目で示された「縁起学」の方法は、文献学的手法にフィールドを視野に入れた、実態性、場の問題が付与されることによって、より立体的かつ生態学的検証を可能にする。そこには、縁起が生成し享受された空間の再現と把握を目指す「縁起学」の研究姿勢が貫かれている。

本書に対する若干の欲深な私見を述べる。と、もう少し、書誌学的視点や絵画的視点を取り込んだ項目があってもよいのではないかと感じた。例えば、前者については、縁起がどのような形態で流布したか、絵巻か冊子本か、一枚刷かという点や、制作者（版元などを含む）としてどのような場が縁起制作に関与していたかについても問題となろう。また、変容するのは縁起の詞書のみならず、絵も同様である。寺社ではなく、制作者側の意図によって、挿絵の差替えが行われた事例もある。

後述するシンポジウム（二〇〇六年三月十八日）の席上で、藤巻和宏氏は、挿絵の差替えの問題を取りあげ、出版者側の意図により、縁起が〈聖典〉でなくなっていく事例を示された。このような視点は、今後検証が進められるべき課題であろうと思う。また、縁起の担い手の問題として、生業との繋がりはどのようなであろうか。生業に携わる人々が持ち伝えた「由来」のようなものも、そこに「信仰」の一端が垣間見られるならば、やはり「縁起学」の研究対象となり得るだろう。本書が提唱する「縁起学」は、〈縁起Ⅱ 寺院から民衆へ〉という一方向的な構図ではなく、在地がいかに縁起を享受し、新たに生み出していったか、そのダイナミズムを映し出す学問でもある。民衆側から縁起を捉えるという視座が重要となる。そもそも、寺社の伝承と信仰を支えたのは民衆でもあり、民衆の中で縁起がどのように機能していたかを考えることこそ、縁起を通して文化史を考えるとこのように繋がるはずだ。ならば、生活の中でどのように縁起が機能したか、生業という人間の根本的な営為の中からも検討がなされるべきであろう。おそらく、寺院側の意図とは必ずしも合致しない、民衆の精神史の立ち上げに

繋がるだろう。また、近世期以降、特に巡礼の隆盛に伴い、多くの寺社縁起が制作されたことは周知のことである。巡礼札所全体の実態を視野に入れ、個々の縁起研究を進める必要がある。巡礼は、縁起制作の背景と密接に関わる問題を含んでいると考えられるからである。これに付随して、近年刊行が進められている略縁起（『略縁起集成』『略縁起研究と資料』）をどのように研究していくかについても課題となるだろう。これらの点については、既に近年、本書の執筆者らをはじめとする諸氏によっても積極的に研究が深められつつあるが、今後の「縁起学」の課題として敢えて付言しておきたい。

第二部で展開される「縁起学」の定義については、「由来」と「信仰」が鍵となっている。また、根本に「通時代性」神話性（徳田和夫）があることも忘れてはならない。モノガタルという人間の営為は、時代を超え、神話性を帯びる。やがて、語りの多様化を生み出し、寺院の信仰と在地の信仰は相互に作用しあい、時に独自性を膨らませつつ展開する。本書では、「縁起学」について、チームの提示と大枠が議論され、示されるにとどまっている。具体的かつ固定的な意味づけはなされて

いない。しかし、それが「縁起学」という学問のあり方なのではないかと思う。勿論、「縁起学」を学問形態、方法として提唱するうえで、何らかの定義づけは必要となるが、細かな定義づけにより、研究対象を狭めてしまうことを危惧する。今は、本書に示される諸研究を含め、更に様々に展開すると思われる多様な「縁起学」の可能性を模索すべきではないかと感じる。定義づけ、その必要性については、『続・寺社縁起の文化学』誕生までの課題とするのが良いのではないかと提案したい。

我々は、自身が関心を抱く対象を分析する際、報告する際、領域というものが、知らず知らずのうちに自分自身の可能性を狭めていることに、どれくらい敏感だろうか。便宜上つくられたはずの学問領域が自身の研究を拘束してしまうことがあってはならない。一つの事象を説明するために、どのような方法も、どのような史料をも活用し、取り入れる姿勢は肝要であろう。そのことに改めて気づかせてくれたのが本書であった。本書を、旧来の学問領域で言うならば、文学、民俗学を専門とする研究者は勿論、歴史学を専門とする研究者にも手にとっていただき、積極的に

議論に参加してもらいたいと切に思う。そして、そのために、「縁起学」を志す誰もが寛悟すべきことがある。言うまでもなく、縁起研究の蓄積は深く広いのであり、それを丁寧に再読、再評価、再構築することが求められる。本書では縁起について、桜井徳太郎氏（『日本思想大系』『寺社縁起』）の定義が引かれているが、勿論、氏の定義づけに従っているが、研究が進められてきたわけではない。筑土鈴寛氏（『筑土鈴寛著作集第四巻 中世・宗教藝文の研究』二）や五来重氏をはじめとする文化史学研究者による一連の研究を再読し、どのように評価し、位置づけ、展開させていくかは「縁起学」の構築に不可欠な課題であろう。本書は、文学、民俗学を主たる専門とする研究者の論稿が多く収載されている傾向にある。しかし、本書が提唱する「縁起学」は、旧来の学問体系でいうならば、領域なき研究であり、どこまでも追究する探究心こそが、この学問を支えていくと思う。自ずと「縁起学」は学際的研究となろうし、幅広い知見が求められることにもなる。

最後に、本書との関係を絡め、近年の学会動向についても確認しておきたい。「縁起学」が提示する視座は、二〇〇一年度の仏教文学

会のシンポジウム「寺社縁起の解剖学」の開催にも表れている。また、二〇〇一年より発足した寺社縁起研究会、二〇〇四年より発足した巡礼記研究会など、若手研究者を中心とした寺社の文芸活動と密接に関わる研究会が誕生し、その成果が次々に刊行されている。

そして、本書刊行後には、学習院女子大学にて、伝承文学研究会、寺社縁起研究会合同シンポジウム「寺社縁起の文化学―新たな縁起研究をめざして―」（二〇〇六年三月十八日）も開催され、藤巻和宏氏（室町・江戸期の長谷寺縁起―「本縁起」から絵巻・絵入版本・略縁起へ―）、菊池政和氏（「中将姫物語の近世の変容―物語・狂言・略縁起―」）、堤邦彦氏（「近世高僧伝の周辺―略縁起から見えるもの―」）らの報告と併せて、「縁起学」の定義と可能性をめぐって活発な議論が繰り広げられた。

寺社縁起研究は、これまで注目されていなかった史料を含め、新たな地域史料や寺院史料の発掘と実態調査によっても、裏付けられ検討が深められるべきである。地方寺院に関する研究は、一部を除いて、殆どなされていないのが現状である。研究の着実な進展は、地方寺院の史料発掘とネットワークを意識し

た上での、各寺院及び周辺に関する研究の積み重ねが不可欠である。

また、併せて研究会の発足と活発な議論も重要である。シンポジウム後の経過として、数回の準備会を経て、二〇〇六年十二月、関東支部、関西支部に続き、寺社縁起研究会東海支部（於中京大学）が発足した。参加者の専門分野は上代から近世までの文学・歴史・民俗・美術・和漢比較と多岐にわたる。東海支部では、東海地区を中心とした寺社縁起ほか諸史料の実地踏査、及び研究発表を行う。地域のネットワークから、さらに他の地方へ、やがて全国へと壮大なスケールで、深みを増しながら、今後「縁起学」は幅広く展開していくことになるだろう。

『寺社縁起の文化学』は、モノガタリの無限の連鎖と広がりを我々の眼前に開示する。縁起は、人間が生み出すあらゆる事象と密接に結びつくものである。そして、「縁起学」を通して浮き彫りとなるのは、人文系諸学問が長らく解明を目指してきた、人間の歩み（生活史）ではなからうか。「生活」と密接に結びつく「信仰」を紐解くうえで注目できる「縁起」は、「人間」を紐解く鍵ともなるはずだ。本書が提示する「縁起学」に立脚した研究の

蓄積は、必ずや「生活の学」として、人間の生活の種々層を焙り出す「文化学」解明への架け橋となるはずだ。本書は、旧来の学問体系を越境する「縁起学」の提唱を実現し、その方法を鮮やかに提示した記念碑的意義をもつ学術書である。「民衆史の縮図」（堤邦彦）を手に「人間とは何か」を求める旅が今始まったのである。

（*敬称略）

（二〇〇五年、本体六五〇〇円、森話社）

（ひおき・あつこ／名古屋市立大学）